

前の不才にて、何とて成申ものに候哉と被申候。其時帶刀被申候は、いや不才にて勤得まいと申事にては無之候。其方腰がぬけて居申故、勤得まいといふ事にて候と被申候へば、周防守驚被申、手前腰がぬくるとは如何の儀と被申候へば、帶刀其時被申候は、よく合點して見られ候へ。親が見立て其方可然と申に付、上にも被仰付候。君父の御意といふものにて候。外に可被仰付人、思召當り無之に付如此に候へば、此上は辭退に不及事に候。不及是非と申物に候へば、罷越つとめ候て仕そこなひ候はゞ、腹を切てのけ候へばよく候。それに跡先を考候は腰抜けと申ものにて候。是程に其方こしぬけ候はんとは不存候と申され候へば、周防守合點いたされ、御受被申上候て上京有之。伊賀守へ對顔して、此度御替りに私を御見立被成候て被仰上候儀、御恩難有奉存候得共、御情なき儀に候とて落涙候へば、伊賀守其時、さては此殿は世話をしらぬと見え申候。あつゝ火子にはぬひと申事有之と被申候。世話は參河言葉にて俗語の事を申候。周防守被申候は、第一公事沙汰承候事大切の事に奉存候。私向後、意得に罷成候儀候はゞ、被仰聞被下

候へと被申候へば、伊賀守被申候は、別事も無之候。鈴木殿の奥州下りと、小僧三ヶ條と、此二つをよく合點候へばよく御座候。鈴木、熊野より山伏の形にさまをかへ、はるゝ奥州へ七十五日と申に着申候由、舞にも舞候。久敷かりたると計打ち、候ては濟不申候。たゞ今熊野より奥州へいか程と被存候哉。二十日ばかりには自由に參處にて候。然るを七十五日と申所がき、所にて候。七十五日懸り候は、定て鎌倉より吟味もつよく、道も通りがたく候故、野にふし山にふし候て、人目を忍び候て、いか程の苦勞を聞いたし候て參候。然るを七十五日に着きたる、久しく懸りたるよなとばかり云てのけ候ては、始終の事合點參物にて無之候。公事を承るも左様に候。書面にはさやうにかきくどかれぬ物に候ゆゑ、其大要を書付候て出し申候。然るを公事承候者あしく見候ては、下の情中々知れ申儀にて無之候。先づ公事仕と申儀も、證文を調、證人をたのみ、色々苦勞を仕候て申出す事に候へば、先づ容易ならぬ事と被存がよく候。擬其申立の訴訟を見申も、幾度も心を付候て、おしはかり見不申候ては、只一通りの工面ばかりにて參物にて無

之候。さては小僧三ヶ條と申事、或者我子を出家に仕とて、去る寺へ小僧に出し置候處、親の方へ參候て住持の遺様無理に候て、つとめられ不申旨申候故、親しかり候へば、其小僧申候は、味噌をすり候へばすり様惡敷とてしかり申候。雪隠へ參候へばしかり申候。此頃つぶりをすられ候故すり候へば、すり様惡敷とて叱り申候由申候故、親承候て、夫は近頃きこえぬ儀にて候。左様に候はゞ罷越候て取返可申とて、寺へ參候て右の段申候へば、住持申候は、夫は相違にて候。味噌の事、すり鉢にてすり候へばよく候。然るをなべに入候て、しゃくしにてすり候故叱り申候。其證據にはすり折候杓子是に候とて、いくつも出し候て見せ申候。次に雪隠の事、雪隠へ參候をなにとて叱り可申哉。此ほど客人の爲に新しく雪隠をこしらへ置候。此小僧用事を申付候得ば、其まゝ雪隠へ參候とて、右の客雪隠へはいりねて居申候故しかり申候。其證據には右の雪隠、常には鎖おろし置候處、鎖をぬち切申候とてぬちきり候鎖を出して見せ申候。次につぶりすらせ候へば、はらをたて候て、ひた物に拙僧あたまをわざとすり申候。これ見候へとて頭巾を抜候へば、つぶり

に七八ヶ所もかみ剃疵有之候。其時親得心いたし申候。公事を承り候にも此意得有之候。片口を承候へば、さて／＼無理なる事を申かけ候と存事も有之、又さて／＼道理と存儀も有之候得共、とくと承候へば、相違の事、後に知れ申候間、必粗忽に一偏に心得申事惡敷候。此二つさへよく心得候へば、別に替りたる儀も無之と被申候。周防守殿此訓誠を忘れ不被申候て、父子相續にて良吏の名を得被申候。周防守殿公事を聞被申候節は、自身に茶を挽被申候て、障子を隔て、聞被申候。心の静り申時分は、茶のおり様格別細かに罷成申候。其時分茶を挽き／＼段々といはせて聞被申候由。居間より愛宕山見え申候よし。公事の場合へ出被申時は、毎朝愛宕を遙拜して出被申候。いかゞの儀に候哉と尋候へば、公儀の御名代に成候て公事を承候。萬一私の一念おこり申候はゞ、蹴殺して被下候へと心中誓候て罷出候よし被申候由、是程に誠心を被盡儀に候。殊勝成事に候。一、井上新左衛門口きゝの名譽井上新左衛門事名譽の口きゝにて候。もと御右筆にて候。後に御勘定頭に成被申候。或時初鰯を何方よりか獻じ申